

「国際バカロレア・中等教育プログラム」 の教育方法を取り入れた授業実践と その効果

大阪府／帝塚山学院中学校高等学校 教諭 道中 博司

概要

本研究では、国際バカロレアの「中等教育プログラム（Middle Years Programme：MYP）」の教育方法を取り入れた英語授業を行い、その効果を調査した。中学1年生42名に約9か月間の実践を行った。

MYPでは、包括的な学習、多文化理解、コミュニケーションという3つの概念を基本に据え、自己の価値観を築きながら、国際的視野を発達させる生徒の育成をめざす。その目標を実現するために、教科ごとの目標や評価規準が設けられている。また、教科の指導内容を生徒の実生活に結びつけるための仕組みが作られている。それらを盛り込んで、「単元プランナー」と呼ばれる授業案を作成し、授業実践を行う。

調査の結果、MYP教育を取り入れた英語授業を行うことで、生徒の英語学習意欲と異文化交流志向が高まり、「英語学習の実利的な動機」、「英語を学ぶ意欲」、「異文化交流志向」について統計的に有意な差が見られた。英語力についても、聞く力、読む力ともに得点が上昇した。

1 はじめに

1.1 研究の背景

本研究では「国際バカロレア（IB）教育」を取り入れた授業実践とその効果を検証する。まずIB教育全般について概観した後、日本の中学校に当たる「中等教育プログラム（Middle Years Programme：MYP）」についてまとめる。そしてMYPの教育方法を活用した英語授業実践の報告と、その調査結果

について述べる。

2011年6月「国際バカロレアレベルの教育を実施する学校を5年間で200校程度へ増加させる」という目標が、文部科学省の「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」の一部として掲げられた（文部科学省、2011）。この提言ではIB教育の具体的な内容までは述べられていないが、IBの高校に当たる「ディプロマ資格プログラム」は、その特徴の1つとして、すべて英語で授業を行う必要があるなど、日本の一般的な学校が導入するにはハードルが高い点も多い。一方、中学校に当たるMYPでは、より自由度の高い導入が可能であり、一般的な学校で、特に英語教育で参考にできる部分が多い。こうした理由から、本研究ではMYPの教育方法に従った実践を行った。

1.2 研究の目的

本校は中高一貫の私立女子校である。6学年の各学年に約230名が在籍している。本研究には中学1年生42名が参加した。彼女たちの英語力の目安として、中1の3学期末で、英検5級25名、4級11名、3級2名が合格しているという状況である。英語の時間が週に5時間あり、机上の学習だけで終わらないコミュニケーション・ツールとしての英語力の育成をめざして、より良い方法を模索している。その1つとして、筆者はIBのMYP教育に関心を持ち、できる範囲で実践に取り入れている。

本研究の目的は、本校のような、学校教育法第1条に規定されている日本の一般的な中学校で、MYP教育を取り入れた授業がどのような効果があるかを検証することである。MYPの教育内容を取

り入れて1学期5月末から3学期末まで実践を行った。その約9か月間の実践の結果、次の2点についてどのような変化があるかを調査した。

- (1) MYP教育を取り入れた授業を行うことで、生徒の英語学習意欲および異文化交流志向が高まるだろうか。

質問紙(資料1)を用いて、英語学習の意欲および異文化に対する態度の変化について、約9か月の指導実践でどのような変化があるかを調査した。

- (2) MYP教育を取り入れた授業で、英語の力は伸びるだろうか。

一般的なペーパーテストで測定できる英語の力は、MYP教育を行った場合でも向上するのかを調査した。アルファベットやフォニックスの学習を始めたばかりの中学1年生1学期に第1回目のテストを実施するため、聞く力を問う問題が中心となった。

2 IB教育について

2.1 IB教育の始まりと構成

1968年に発足した国際バカロレア機構(International Baccalaureate Organization: IBO)は、スイスのジュネーブに本部を置き、認定校に対する共通カリキュラムの作成や国際バカロレア試験の実施および国際バカロレア資格の授与などを行っている(文部科学省, 2012)。

その教育理念は「IB ミッション・ステートメント(理念)」として以下のように記されている。(IBO, 2009a)

国際バカロレア(IB)は、多文化に対する理解と尊敬を通じて、平和でより良い世界の実現のために貢献する、探究心、知識、そして思いやりのある若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校、政府、そして国際機関と協力しながら、高度な国際教育プログラムおよび厳格な評価を開発しています。

IBのプログラムは、世界中の児童・生徒に対し、他の人たちをその違いとともに理解し、自分と異なる人々にもそれぞれに理があり得るこ

とがわかる、行動的で、共感する心を持つ生涯学習者となるよう働きかけています。

このような理念をもとに、国際バカロレアには、3歳~19歳の子供の年齢に応じて3つのプログラムがある。

- (1) DP (Diploma Programme: ディプロマ資格プログラム) 16歳~19歳
- (2) MYP (Middle Years Programme: 中等教育プログラム) 11歳~16歳
- (3) PYP (Primary Years Programme: 初等教育プログラム) 3歳~12歳

この3つのプログラムは、1986年にディプロマ資格プログラム(DP)が始まり、1992年に中等教育プログラム(MYP)が、1997年に初等教育プログラム(PYP)が開始されている。DPの課程を修了し、ディプロマ資格取得のための統一試験に合格することで、国際バカロレア資格を取得することができる。そして、その資格が国際的に認められている大学入学資格の1つであるため、滞在する国の制度に縛られることなく、希望する大学に進学できる(田口, 2007)。2012年3月現在、世界141か国で約3,340校が国際バカロレアの認定を受けている。日本では22校あり、そのうち学校教育法第1条に規定されている学校は6校である(文部科学省, 2012)。

2.2 中等教育プログラム(MYP)について

本研究では、中学1年生の英語教育について焦点を当てることから、「中等教育プログラム(MYP)」の教育方法を用いることとした。

MYPは「生徒が卒業後もIBディプロマ資格プログラム(DP)のような学習を継続できるようにしっかりと準備させること、また一生を通して役立つ学びの技能や姿勢を身につけること」(IBO, 2011, p.4)を目的としている。DPでは、カリキュラムから卒業資格試験およびその使用言語まで厳格に規定されているが、MYPでは教育のフレームワーク(枠組み)が示されているものの、その枠の中で「学校は独自のカリキュラムを調整することができる」(p.5)。また、使用言語の規定はなく、「各種の言語によって教えることができる」(p.5)。

2.2.1 学習者像

MYP で育てようとする生徒の姿として、「自己の価値観を築きながら、国際的視野を発達させ、開花させる基盤となる生徒の学習者像」が明示されている。以下の10の資質がそれである (IBO, 2011, pp.9-10)。

(1) 探究する人 (Inquirers)

生来の好奇心を育みます。調査と研究を行うために必要なスキルを獲得し、自主性を発揮しつつ学習します。主体的な学びを楽しみ、この学びの喜びを生涯を通じて持ち続けます。

(2) 知識のある人 (Knowledgeable)

地域、そして世界的に重要な概念、考え、問題を探究します。そうする中で、特定の学問分野に偏らず幅広く、バランスのとれた深い知識を身につけ、その理解を育みます。

(3) 考える人 (Thinkers)

複雑な問題を認識し、それに取り組み、筋の通った倫理的な決定を行うために、批判的かつ創造的に考えるスキルを積極的に応用します。

(4) コミュニケーションができる人 (Communicators)

複数の言語、多様なコミュニケーションの方法を用いて、考えと情報を自信を持って創造的に理解し表現します。まわりの人と積極的かつ効果的に共同作業を行います。

(5) 信念を持つ人 (Principled)

正直さと誠意を持って、公正と公平、そして個人、集団、及び共同体の尊厳に対する尊敬の念を強く持って行動します。自分自身の行動と、その行動に伴う結果に対して責任を負います。

(6) 心を開く人 (Open-minded)

自己の文化と経歴を理解し、大切にすると同時に、まわりの個人と共同体の視点、価値観、伝統に対して心を開きます。常に多様な視点を探して評価し、その経験を糧に成長しようと努力します。

(7) 思いやりのある人 (Caring)

他の人たちが必要としていること、感じていることに対して思いやり、共感、そして尊重する気持ちを示します。他の人たちの生活と環境に良い影響を及ぼすために奉仕し、行動することを自分の責任とします。

(8) 挑戦する人 (Risk-takers)

未知の状況や不確実な事態に対し、熟慮しつつ勇気を持って取り組み、新しい役割、考え、戦略を探る自立した精神を持ちます。自分の理念を守るために恐れることなく、明確な態度を示します。

(9) バランスのとれた人 (Balanced)

自己及び他者の幸福を達成するために、知性、身体、心のバランスをとることが重要であると理解します。

(10) 振り返りができる人 (Reflective)

自己の学習と経験を深い洞察力をもって熟考します。個人の学習と成長を促すため、自分の長所と短所を評価し、理解することができます。

2.2.2 基本概念

上記のような特質を持った生徒を育てることを理想とし、プログラムの基本概念として以下の3つが掲げられている (IBO, 2011, p.11)。

(1) 包括的な学習 (Holistic learning)

(2) 多文化理解 (Intercultural awareness)

(3) コミュニケーション (Communication)

「包括的な学習」では、各教科の教師が分断された状態で知識を注入することだけに終始するのではなく、全教科を上げて、生徒の全人的な教育を行うことをめざしている。これをホリスティック (包括的) な学習と呼び、その実現のために教科間の連携が推奨されている。次の「多文化理解」は、IB ミッション・ステートメントの「平和でより良い世界の実現」を具現化するものであり、地続きで多くの国がひしめくヨーロッパでIB教育が芽生えたことを考えると、国際的視野の発達に重きを置いていることは十分に理解できる。最後の「コミュニケーション」は、国際理解に貢献する重要なスキルという認識から、教科教育でもその力を養う指導が重視されている。

2.2.3 教育方法

本研究で活用した MYP の教育方法の骨子は以下のようなものである (IBO の日本語訳が出版されているものは日本語で、そうでないものは英語で記載)。

(1) 以下の5つの「相互作用のエリア (Areas of Interaction : AOI)」 (IBO, 2011, pp.14-17) と呼ばれる概念を使って、指導内容と生徒の実生活

とを結びつけ、生徒の学習意欲の向上を図る。

- ① 学習の姿勢
自分にはどんな学習方法が合っているか、どんな強みや弱みがあるか。
 - ② 共同体と奉仕
友人・家族・学校の先生・近隣の人々・国際社会など、自分は人とどう関わるのか、どんな影響を及ぼすのか。
 - ③ 健康と社会教育
自分が生きる社会で、どう成長していくのか、社会にどう貢献していくのか。
 - ④ 多様な環境
自分は今どんな環境に生きているのか、その環境を維持し発展させていくための自分の責任は何か。
 - ⑤ 人間の創造性
人間が創造してきたものの歴史と未来はどのようなものか、自分はこれまで何を創造して、これから何を創造していくのか。
- (2) 英語学習を通して、より大きな視点で物事を考えられるような「重要概念」を提示する。例えば、聴導犬を扱ったレッスンを教える場合、「非言語コミュニケーション：補助犬たちと身障者の人たちは、言語によらない方法でコミュニケーションをとっている」などが「重要概念」となる。
 - (3) 「重要概念」を生徒に考えさせるための「単元クエスチョン」(単元で学ぶ内容を総括する発問)を提示する。例としては「身障者の人と、その補助犬は、どのように心を通わせているのだろうか」などである。
 - (4) 「単元クエスチョン」に答えるための「評価活動(プレゼンテーションや個別面接試験などの具体的なもの)」を設定する。
 - (5) 以下7項目の「MYPの目標(Objectives)」(IBO, 2008, p.4)から、どの目標に焦点を当てるか決定する。

Students can:

- ① communicate information, ideas and opinions
- ② demonstrate comprehension of specific factual information and attitudes, expressed in spoken and written contexts
- ③ identify main ideas and supporting details and draw conclusions from spoken and written

texts

- ④ understand and appropriately use structures and vocabulary
 - ⑤ request and provide information in both spoken and written contexts
 - ⑥ engage actively in oral production using comprehensible pronunciation and intonation
 - ⑦ take part in formal and informal communication
- (6) 上記(4)で設定した「評価活動」に対して、以下の5つの「評価規準(Criterion)」(IBO, 2008, pp.20-26)から、どの規準を用いるか決定する。
 - ① 「評価規準A」 Speaking and listening – message and interaction (口頭表現能力のうち主に表現内容について評価するためのもの)
 - ② 「評価規準B」 Speaking – language (口頭表現能力のうち言語形式や発音などについて評価するためのもの)
 - ③ 「評価規準C」 Writing – message and organization (筆記表現能力のうち主に内容や構成について評価するためのもの)
 - ④ 「評価規準D」 Writing – language (筆記表現能力のうち主に言語形式について評価するためのもの)
 - ⑤ 「評価規準E」 Reading Comprehension (読解能力について評価するためのもの)
 資料2は、IBO (2008, pp.20-26)より、筆者が翻訳したもので、生徒にも同じものを配布した。
 - (7) 上記(1)から(6)を踏まえ、「MYP単元プランナー」と呼ばれる資料3のような授業案フォーマット (IBO, 2011, pp.85-87)を作成する。資料3中にある「学習姿勢(ATL)」は、Attitude to Learningの略語である。
 - (8) 1つの単元が終わるごとに自分の学習を振り返り、IBが求める「学習者像」を生徒に意識させる。資料4は、筆者が作成し、活用した「振り返りシート」である。

3 実践内容

本研究の実践で、1学期後半から3学期にかけて扱った内容と、生徒に提示した「単元クエスチョン」は以下のとおりである。使用教科書は『NEW

CROWN 1』(三省堂)で、()内は扱ったレッスンである。

- (1) あいさつと自己紹介の表現を学び「他者への敬意を示すためには、どのように話すべきか」について考える (Lesson 1~2)。
- (2) 自然公園を扱った題材を通して命令文と数の聞き方・答え方を学び、「環境保護を訴える手段として、効果的な言葉表現はどのようなものか」について考える (Lesson 4)。
- (3) 沖縄を扱った題材を通して人称代名詞(三人称)を使った表現を学び、「大阪と沖縄の人と、どちらがより幸せか」について考え、幸福感は人によって、住む場所によって異なることを学ぶ (Lesson 5)。
- (4) 4つの国の子供たちが大切にしているものを扱った題材から自分の嗜好を述べる表現を学び、「自分にとって大切なものは何か。それはなぜか」について考える (LET'S READ 1)。
- (5) 補助犬について扱った題材を通して三人称単数の概念と表現を学び、「ろう者と聴導犬は、どのようにしてコミュニケーションを取っているか」について考える (Lesson 6)。
- (6) 米国の中学生の生活を扱った題材を通して現在進行形を学び、「英語が使えることで、自分の人生はどう変わるか」について考える (Lesson 7)。

3.1 「IB 教育」の説明と「学習者像」の導入

IB 教育について、次の3点に絞ってできるだけ簡潔に生徒に説明した。

- (1) IB 教育とは、ヨーロッパから始まり、現在、世界3,000校以上で取り入れられている教育理念。文化間の相互理解と尊敬を通して、平和でよりよい世界を実現するために、探究心、知識、思いやりのある若者を育てることを使命とする。
- (2) 「相互理解の領域」とは、学校での学習と自分の生活とを結びつけるための概念で、以下の5つがある(「2.2.3 教育方法」(1)と同様のものを生徒に提示した)。
- (3) IB 教育では、生徒に求める「学習者像」があり、それは前述の10項目である(「2.2.1 学習者像」の10項目を生徒に提示した)。

説明の後、筆者が作成した「学習者像ワークシ

ー」(資料5)を配布し、「学習者像」について以下の手順で指導した。

- ① 「学習者像ワークシート」を配布し、「学習者像」について読みながら「自分に当てはまる度合いを1~4で選ぶ」よう指示する。
- ② 1~10の自分の得点を合計し、その得点が「現時点でIB学習者像がどれだけ自分の中に備わっているか」を示していることを伝える。
- ③ 1~10の「学習者像」の中で、「自分が一番大切だと思うものを1つ選び、その理由を書く」ように指示する。
- ④ ペアで、③で書いた内容について発表し合う。
- ⑤ 各自のファイルにプリントをとじる(後に「振り返りシート」(資料4)を書く際に適宜参照する)。

3.2 「米国の中学生」についての実践

授業実践例として、最後の単元であった「米国の中学生」を扱ったものについて述べる。米国の中学生がスペイン語を学んでいるという内容から、日本の中学生が英語を学ぶ意義は何か、自分は英語を学習して将来どのように活用するのかなどについて考えさせることを意図した。

3.2.1 指導の流れ

次の(1)~(9)の指導を2012年2月2日~2月16日で行った。

- (1) 米国の中学校給食や米国で使用されている言語について画像やグラフを見せる。
- (2) 単元クエスチョン「英語が使えることで、自分の人生はどう変わるか」を提示する。
- (3) 教科書本文について、「単語リスト」、「日本語での本文要約」、「部分和訳」、「音読」、「文法説明」を行う。
- (4) 「英語を学ぶ意義」について扱った20分程度のテレビ番組を視聴する。
- (5) 単元クエスチョン「英語が使えることで、自分の人生はどう変わるか」について日本語の作文課題を与える。
- (6) 日本語による生徒の作文をもとに教師が作成した「表現集」を参考に、「単元クエスチョン」について英語での作文課題を与える。
- (7) 教師が「評価規準 C Writing - message and organization」と「評価規準 D Writing - language」

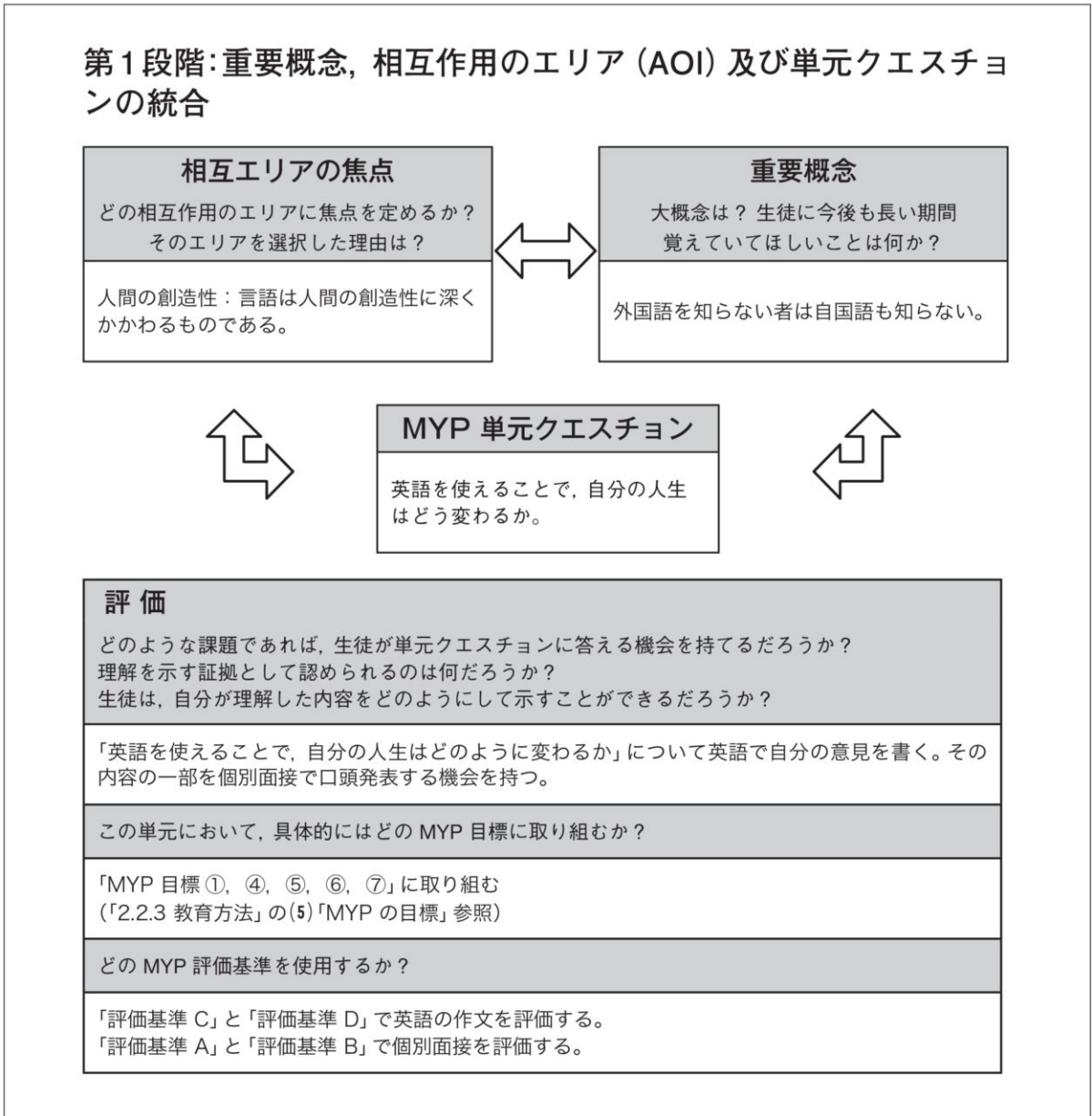
で採点し、返却する。

- (8) 「ワードカウンター」を使った個別面接試験を行い、発話した語数をカウントし、「評価基準 A Speaking – message and interaction」と「評価基準 B Speaking – language」で評価する。
- (9) 教師が「振り返りシート」を配布し、生徒に記入するよう指示。その際「できるだけ多く書く

こと」と「なぜそう思うのかの理由も書くこと」を伝えた。

3.2.2 「MYP 単元プランナー」

この実践の際に作成した「MYP 単元プランナー」は図1のようなものである。



第 2 段階：逆向き設計：評価から探究による学習活動まで

(「5.2 MYP 教育の意義」参照)

<p>内容</p> <p>生徒が単元クエスチョンに答えられるようにするには、(コース概要にある) どのような知識やスキルを活用することになるのか？ 国、都道府県、市や地域によって定められている場合には、どの程度の水準を目指し、どのようなスキルに取り組むべきなのか？ そのような第 1 段階の重要概念を発展させるために、その水準やスキルをどのように分類して取り組むことができるのか？</p>	
<p>教科書の学習を通して学んだ語彙・文構造を応用して、自分の意見を表明する。中学校学習指導要領の目標にある「初歩的な英語」に当たる BICS (Basic Interpersonal Communicative Skills) をもとに、CALP (Cognitive Academic Language Proficiency) による英語の作文を書く経験をする。</p>	
<p>学習姿勢 (ATL)</p> <p>この単元では、教科別および総合的な学習スキルをどのように伸長できるのか？</p>	
<p>英作文で「時間内で一定の成果を出す」ことを目標とすることで、自己管理・熟考(自分の意見をまとめる)・活用(教科書本文や学んだ英語表現の活用)という学習技能を伸ばす。</p>	
<p>学習経験</p> <p>生徒は自分に何が期待されているかをどのようにして知ることか？事例、ルーブリック(評価指針表)、テンプレートを見ることはできるのか？ 生徒はどのようにして知識を身に付け、必要なスキルを実践するか？このようなスキルをどのように応用しながら実践するか？ 生徒がすでに持っている知識で十分か？どのようにしてそれがわかるか？</p>	<p>指導方策</p> <p>単元の途中で生徒にフィードバックをするためには、どのように形成的評価を利用すればよいのか？ どのような多様な指導方法を用いればよいのか？ 全生徒に対して、指導と学習をどのように個別対応しているのか？母語以外の言語で学習している生徒のためにどのような準備をしてきたか？(教育に関する)特別支援のニーズのある生徒に対してどのように配慮してきたか？</p>
<p>「評価基準」を事前に参照した上で活動に取り組む。「表現集」を活用し、英語の表現力を補助する。</p>	<p>日本語の作文で自己表現を十分に行う。「表現集」を活用させながらも、英語によるより発展的な自己表現を教師の個別指導で補助する。</p>
<p>リソース</p> <p>どのようなリソースを利用できるか？ 単元を学習する中で、生徒の経験を促すために教室環境、地域の環境、または共同体をどのように利用すればよいのか？</p>	
<p>教室内に設置されたプロジェクタを使い、画像や映像メディアを通して、単元内容についての知識を与え、生徒の思考を活性化させる。同学年を持つ教師間で連携を図り、英作文指導など個別指導の必要な時間にアシスタントとして参加してもらう。</p>	

継続的な振り返りと評価

継続的に記録しながら、以下の質問について考えてください。この他にも、『MYP：原則から実践へ』の「単元設計」に関する章に学習意欲につながる質問があります。

生徒と教師

何が魅力的だと思ったか？学問分野別の知識とスキルは、その実力を試されるような場面があったか？学習を通して、どのような探究が生じたか？どのような発展的活動が始まったか？単元と自己の学習の両方について、どのように振り返ったか？この単元を通じて、IBの学習者像のどの特質を取り上げて働きかけをしたか？生徒が自主的に行動するために、どのような機会があったか？

可能な関連づけ

自分が担当する教科群の他の教師や他の教科群の教師達ときちんと連携できたか？他の教科との連携を通じて、どのような学際的理解が形成されたか、または形成が可能だったか？

評価

生徒は、自己の学習を明確に表すことができたか？
・各単元に設定された学習目標について、その評価課題によってどの程度生徒の達成度を推し測れるのか？評価基準項目のどのレベルにも生徒が到達可能になっているかをどのように確認できたか？

データ収集

・集めるべきデータをどのようにして決定したのか？それは役に立ったか？

単一教科による試験的な MYP 授業実践であるため、他教科との連携はできていないが、「振り返りシート」の記入、および授業アンケートへの記入によって、生徒の実態をつかむよう心がけた。今回の英作文は、中学1年生にとってはかなり高度な内容についての英語によるエッセイ・ライティングであったため、使用語彙も生徒たちにとって難解なものになりすぎた。そのため口頭による発信にはより長い指導期間が必要であった。今後、継続的に同様の内容について考える機会を与え、口頭発表・プレゼンテーションなどの発信にまで高める指導を続ける価値があると思う。

▶ 図1：「米国の中学生」を扱った単元の「単元プランナー（MYP教育を実践する際に作成する授業案）」

3.2.3 「表現集」について

最初にエッセイ・ライティングに取り組んだのは2学期中頃であった。中学1年生2学期に、自分の意見を論理的に述べるエッセイ・ライティングを行うことは、生徒の語彙・文法レベルから考えて、難しい場合が多いだろう。しかし、MYPの「評価規準」A～Eのうち、A～Dの4つがアウトプットにかかわるものであり、それらの評価を使うには、生徒にスピーキングまたはライティングどちらかの課題を与えねばならない。中学1年生2学期の時点では、論理的に自分の意見を表現するには、じっくり考える時間が取れるライティングの方が、生徒にとって取り組みやすいのではないかと考えた。

吉田・柳瀬(2003)は「日本語で言いたいことを、全て一気に英語にしようとしなくていい。／しかし「語順」には十分注意を払いなさい」(p.94)ということをもとに意識させてはどうかと提案している。そこで、生徒にまず日本語で言いたいことを整理させ、それをもとに教師が「表現集」を作成し、生徒はその「表現集」にある英語の表現を活用して英作文をするという形をとった。生徒は自分の言いたいこと「全てを一気に」英語にはできないが、それに近いものを表現集から選び、語順に注意しながらエッセイ・ライティングを行うことになる。40人を超えるクラスサイズで、入門期からエッセイ・ライティングを行うにはそれなりの効果があったと考えている。図2は、3学期、この実践で配布した「表現集」である。

3.2.4 「ワードカウンター」について

前述したように、MYPで用いる5つの「評価規準」は、スピーキング(A, B)とライティング(C, D)、リーディング(E)である。つまり「5つのうち4つがアウトプットに関するもの」ということになり、MYPでの外国語教育はアウトプットが重視されていると言える。一方日本の現状は、高校入試、大学入試とも、大きな割合を占めるリーディングと一部リスニングのみで構成されており、中高の英語教育もそれに影響され、インプットの比重が大きい。

インプットの量が多いこと自体は第2言語習得研究の観点から効果の高い指導法と言えるが、日本の場合はインプットの量自体が不足しており、インプットを促進するアウトプットの機会も少ない。また言語の正確さを重視しすぎる傾向がある(白井,

英語使えることで、自分の人生はどう変わるか。		学習技能1： 使える表現で、自分の意見を伝える。 学習技能2： 時間内で一定の成果を出す。
1 英語が使えれば、私は～できるだろう。	If I can use English, I can ~.	
2 それは～だからです。	It is because ~.	
3 英語は国際語だ。	English is an international language.	
4 英語が話せること	being able to speak English	
5 ～は私たちの視野を広げる。	~ broaden(s) our views.	
6 ～はより良い就職の機会を増やす。	~ give(s) us more chances to get better jobs.	
7 人生がより豊かになるだろう。	My life will be richer.	
8 いくつかの会社では英語を使っている。	They use English in some companies.	
9 我々には英語を話す能力が必要だ。	We need English speaking ability.	
10 どこに住んでいても	wherever you live	
11 日本語しか話せなければ、私は～だ。	If I speak only Japanese, I ~.	
12 私は～とコミュニケーションがとれる。	I can communicate with ~.	
13 世界中の～	~ all over the world	
14 私が言いたいこと	the things I want to say	
15 観光に行く	go sightseeing	
16 外国人	people from other countries	
17 英語を使う機会	a chance to speak English	
18 将来に	in the future	
19 外国に旅行する	travel in foreign countries	
20 外国の文化について学ぶ	learn about foreign cultures	
21 日本と外国との違い	differences between Japan and foreign countries	
22 英語が話せるようになりたい。	I want to be able to speak English.	
23 交流を深める	promote friendship	
24 日本は不景気だ。	Japan is in a recession.	
25 日本は高齢化社会だ。	Japan is an aging society.	
26 英語を身につけるのは難しい。	It is difficult to acquire English.	
27 私は通訳者/英語のガイドになりたい。	I want to be an interpreter / English speaking guide.	
28 たくさんの利点がある。	There are many advantages.	
29 英語の新聞を読む。	I can read English newspapers.	
30 世界の政治について学ぶ。	I can learn about politics in the world.	
31 英語はとても大切だ。	English is very important.	
32 例えば、～	For example, ~	
33 外国語を知らない者は自国語をも知らない。	If you don't know a foreign language, you don't know your own language.	
34 英語は世界への扉を開いてくれる。	English opens the door to the world.	
35 英語は私たちの人生を大きく変える。	English makes a big difference in our lives.	
36 私の夢がかなうだろう。	My dreams will come true.	
37 字幕なしの映画	movies without subtitles	
38 絶対～だと思う。	I'm sure ~.	
39 世界で活躍する	complete on a global stage	
40 英語だけでなく他の言語も	not only English but also other languages	
41 私はそれを楽しみにしている。	I am looking forward to it.	
42 結論としては、～	In conclusion, ~	

▶ 図2：エッセイ・ライティングの「表現集」

2012)。

そこでMYP教育のアウトプット重視に対応し、流暢さを伸ばすために「ワードカウンター」という実践を取り入れた。西(2010, pp.6-8)に基づき、その方法を以下に要約する。

- (1) 図3のような「ワードカウンター」と呼ぶプリントを作成し、生徒全員に配布する。
- (2) 生徒はペアになり、ジャンケンなどでスピーカーを決める。
- (3) 「ワードカウンター」の左上の 1 のところに人差し指を置いて、スピーカーが話し始めたら、スピーカーの話す単語に合わせて、指を

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
71	72	73	74	75	76	77	78	79	80
81	82	83	84	85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96	97	98	99	100

▶ 図3：「ワードカウンター」

2 3 4 …と移動させ、語数を数えていく。

- (4) 制限時間が来たら、スピーカーに話した単語数を教える。
- (5) スピーカーは記録用紙に自分の話した語数を記録する。
- (6) 役割を交代する。

この活動は、2学期半ばから、ほぼ毎回の授業で行った。活動の時間は、扱う内容によって異なるが、5～10分程度であった。この活動の効果は大きく、2学期末の個別面接テストでは90秒間で100語以上発話する生徒もいた。

3.2.5 エッセイ・ライティングの評価と生徒の作品

このライティングにおける評価は表1のようになった。資料2の「MYP 評価規準」から「評価規準C」と「評価規準D」の2項目（それぞれ8点満点）で評価した。

■ 表1：エッセイ・ライティング2の評価 (n = 42)

	平均点	標準偏差	最高	最低
評価基準C (8点満点)	6.3	1.0	8.0	3.0
評価基準D (8点満点)	6.2	1.0	8.0	3.0

図4に生徒の作品を紹介する。作品中の右上のスコアの左の数字が「評価基準C」の得点、右が「評価基準D」の得点である。

66

If I can use English, I can communicate with people all over the world and, it makes my life richer.

I can speak English to foreign people. I can not ^{communicate in English} communicate in English. So I ~~can~~ study English. If I can use English, I can choose ^{to be an} interpreter or world popular singer. I can compete on a global stage. It makes my life richer. Also, I can watch movies without subtitles. I can read English newspapers ^{and}.

In conclusion, I can communicate with people all over the world. If I can use English, ~~my~~ my dreams will come true.

76

If I can use English, I can have more chances to get a better job. English opens the door to the world.

I'm sure ^{it is useful to} complete on a global stage. For example I can read English newspapers ^{and} I can see movies without subtitles. Not only English but also other languages ^{like} Spanish and Chinese. They are useful languages.

In conclusion English is very important. but, It is difficult to acquire English. English ^{will make} my dreams will come true. I am looking forward to it.

If I can use English, I can enjoy my life. Being able to speak English broadens our views. My life will be richer.

For example, English give us more chances to get better jobs. It is because English is an international language. They use English in some companies, Because we need English speaking ability. If I travel in foreign countries I can become friends with people from other countries. I can become friends with people from other countries. promote friendship.

In conclusion, English is very important. English opens the door to the world. English makes a big difference in our lives. I want to be able to speak English

▶ 図 4 : エッセイ・ライティングの生徒の作品例

3.2.6 個別面接テスト

先に述べた「ワードカウンター」を使った会話練習のまとめとして、生徒は教師と英語で90秒間の会話をします。評価は、「発話した語数」と「評価規準A」、「評価規準B」の3項目。60秒前後で日常会話をを行い、残りの時間を「英語が使えると、自分の人生はどう変わるか」について生徒が意見を述べる。順番待ちの生徒が「ワードカウンター」を手に持ち、テストを受けている生徒の発話語数をカウントし、教師が「評価規準」を使って評価する。個別面接テストの評価と発話語数は表2のようになった。

■ 表 2 : 個別面接テストの評価と発話語数 (n = 42)

	平均点	標準偏差	最高	最低
評価基準 A (8 点満点)	7.3	0.9	8.0	5.0
評価基準 B (8 点満点)	7.4	0.7	8.0	6.0
発話語数 (90 秒)	64.5	11.3	87.0	36.0

3.2.7 「振り返りシート」

これは「自分が何を学んだのか、それを今後どう生かすのか」を認識させる活動である。生徒たちにとって5回目の振り返りシート記入である。図5に生徒の書いたものを紹介する。

1 単元クエッション(unit question)は何でしたか?
英語が使えるれば、自分の人生はどう変わるか。

2 どの学習者像(learner profile)の特性を、どのように使いましたか?
Inquirer : 探究する人 Knowledgeable : 知識のある人 Thinker : 考える人 Communicator : コミュニケーションがとれる人
Principled : 道徳を持つ人 Open-minded : 心を開く人 Caring : 思いやりのある人 Risk Taker : 挑戦する人
Balanced : バランスのとれた人 Reflective : 振り返りができる人
私は、「Caring」を使いました。
他人を思いやりながら、話したり、書くことが大事だと思ったからです。

3 この単元クエッションに関するあなたの考えはどのようなものですか?
英語が使えるれば、自分の人生は、何においても役立つと思います。たくさんの人とコミュニケーションがとれると思います。

4 この単元で重要なことは何だと思いますか? また重要概念(significant concept)は何でしたか?
外国語を知らない人は外国語も知らない。

5 この単元で難しかったことは何ですか? またどのようにして改善していけますか?
英文で自分が思っていることを書くことです。
改善するためには、もっとたくさん文法や単語を勉強しないと行けないなと思いました。

1 単元クエッション(unit question)は何でしたか?
英語を使えれば、自分の人生はどう変わるか

2 どの学習者像(learner profile)の特性を、どのように使いましたか?
Inquirer : 探究する人 Knowledgeable : 知識のある人 Thinker : 考える人 Communicator : コミュニケーションがとれる人
Principled : 道徳を持つ人 Open-minded : 心を開く人 Caring : 思いやりのある人 Risk Taker : 挑戦する人
Balanced : バランスのとれた人 Reflective : 振り返りができる人
「knowledgeable」、知識のある人を使いました。
英語を使ったり、覚えたり、勉強したりすることで、人生が変わるということは知識が必要だと思っから。

3 この単元クエッションに関するあなたの考えはどのようなものですか?
英語を使えば世界のひとと友達になれたり、外人と話せたり、外国に住めたりできると思います。すると、人生は広く広がると思います。

4 この単元で重要なことは何だと思いますか? また重要概念(significant concept)は何でしたか?
外国語を知らない者は外国語も知らない

5 この単元で難しかったことは何ですか? またどのようにして改善していけますか?
現在進行形です。ing形にするのが難しかったです。
自学帳で練習したり、ワークを使ったりして覚えてテストに望みたいです。

1 単元クエッション(unit question)は何でしたか?
英語を使えれば、自分の人生は
どう変わるか

2 どの学習者像(learner profile)の特性を、どのように使いましたか?

Inquirer: 探究する人 Knowledgeable: 知識のある人 Thinker: 考える人 Communicator: コミュニケーションがとれる人
Principled: 道義を持つ人 Open-minded: 心を開く人 Caring: 思いやりのある人 Risk Taker: 挑戦する人
Balanced: バランスのとれた人 Reflective: 振り返りができる人

Communicator
私は人見知りな面もあってコミュニケーションをとるにはもう少し勇気が
いるけれど、外国人の方はめいめい入っているのと同じようなことから
駅道で自分からコミュニケーションをとりにいって、優しく教えてあ
げられるよさになりたいです。この単元では、コミュニケーションをもっと
考え使いました。

3 この単元クエッションに関するあなたの考えはどのようなものですか?
英語を使えることで、外国へ行きたいはコミュニケーションか
とれるし看板も日本でもさうだけれど、英語で下に書いてあるの何と書い
てあるかわかるので、英語を使えばとても楽で、たくさんの方と話せ
ていろんなことも教えてもらったりして人生の旅行はかり行けて
とても楽しい人生になると思います。

4 この単元で重要なことは何だと思いませんか? また重要概念(significant concept)は何でしたか?
重要概念: 外国語を知らない人は、本国語も知らず、
言葉がわからなくても、だいたいのことを覚えて、外国に住んだり、旅
行に行ったり言葉になれて、たくさんの人とコミュニケーションをと
るようになるのはいいと思う。

5 この単元で難しかったことは何ですか? またどのようにして改善していけますか?
英語を使うことについて何か出来るかを改めて考えてどうにかして活
やくか考えるのが難しかったです。それは困っている外国人を見かけた
ら、声をかけてあげて自分の気持ちはどうなるか、聞き取りをよく考
えていけばいいと思うそれをどう自分で受け入れてどうするかを
実際にやってみていけばいいと思います。

▶ 図 5: 「米国の中学生」を扱った単元の「振り返りシート」

4 実験道具および調査結果と考察

4.1 英語学習および異文化に対する態度を調査する質問紙

MYP 教育を取り入れた授業を行うことで、生徒の英語学習に対する意欲および異文化交流への志向が高まるかを調査するために、質問紙を用いて調査を行った。参加者は中学1年生女子42名である。2011年9月2日に1回目を実施、2012年2月18日に2回目を実施した。

以下の5項目について調査するため、1項目につき6～7問、計33問の質問をした。質問項目は、Dörnyei (1990) および Yashima (2002) から抽出

した。

- (1) 英語学習の実利的な動機: English has direct pragmatic benefits (Dörnyei, 1990, p.75)
Cronbach $\alpha = .66$
- (2) 英語を学ぶ意欲: Desire to Learn English (Yashima, 2002, p.66)
Cronbach $\alpha = .72$
- (3) 英語学習の動機の強さ: Motivational Intensity (同上)
Cronbach $\alpha = .76$
- (4) 異文化との接触・回避に対する傾向: Intergroup Approach-Avoidance Tendency (同上)
Cronbach $\alpha = .69$
- (5) 異文化交流志向: Intercultural Friendship Orientation (同上)
Cronbach $\alpha = .76$

1つの項目に対して複数の質問を聞くのは、回答者の答えをできるだけ平均化して、極端な解釈がデータに大きな影響を与えるのを防ぐためである(Dolnyei, 2006)。1つの項目に対する複数の質問に内的一貫性があるか、つまり同じ概念を測定するように作成されているかを図る尺度として Cronbach α を用いる。これが .70程度の値はめざさねばならず、.60に満たないようであれば何らかの不備があると考えねばならない。33問の質問紙を実施した後、Cronbach α が .60に満たないものは、本調査から除外した。その結果、1項目につき3問の計15問の質問紙となった。リカート・スケールは4段階で実施した(資料1)。

4.1.1 英語学習および異文化に対する態度についての調査結果

2011年9月2日に1回目、2012年2月18日に2回目を実施した調査の結果は、表3のようになった。すべての項目において数値が上昇した。「英語学

■ 表 3: 英語学習および異文化に対する態度についての調査結果 (n = 42)

	質問項目	平均 1	標準偏差 1	平均 2	標準偏差 2	t 値	p 値	効果量
1	英語学習の実利的な動機	3.17	0.50	3.42	0.49	-2.69	.010*	.39
2	英語を学ぶ意欲	2.74	0.59	2.89	0.51	-2.02	.050*	.30
3	英語学習の動機の強さ	2.39	0.52	2.55	0.65	-1.83	.074	.28
4	異文化との接触・回避に対する傾向	2.83	0.62	2.99	0.62	-1.86	.069	.28
5	異文化交流志向	3.25	0.56	3.46	0.48	-2.95	.005*	.42

* $p < .05$

習の実利的な動機」および「英語を学ぶ意欲」,「異文化交流志向」について,統計的に有意な差があった。

4.1.2 英語学習および異文化に対する態度についての考察

統計的に有意な差があった項目である「英語学習の実利的な動機」は,「英語が話せれば,仕事などで,たくさん旅行ができる」,「英語が話せれば,高い給料がもらえるなどの利益が得られると思う」,「英語が話せれば,おもしろい仕事に就くことができる」という質問で構成されている。これらは,外国語を実利的な成果を得るための「道具」として考える「道具的動機づけ」に関するものである。本研究の実践期間中に,生徒の「道具的動機づけ」が高まったと思われる。

2つ目の統計的に有意な差があった項目「異文化交流志向」は,「英語を勉強すれば,異文化活動にもっと自由に参加できる」,「英語を勉強すれば,もっと多くの様々な人々と会い,話すことができる」,「英語を勉強して,外国人の友達をつくりたい」という質問で構成されている。これらは,「異文化への興味」と「異文化コミュニケーションを取ろうとする意欲」(Yashima, 2000, p.125: 翻訳は筆者による)を問うものであり,本研究の実践期間中に,この面での生徒の興味・関心も高まったと考えられる。

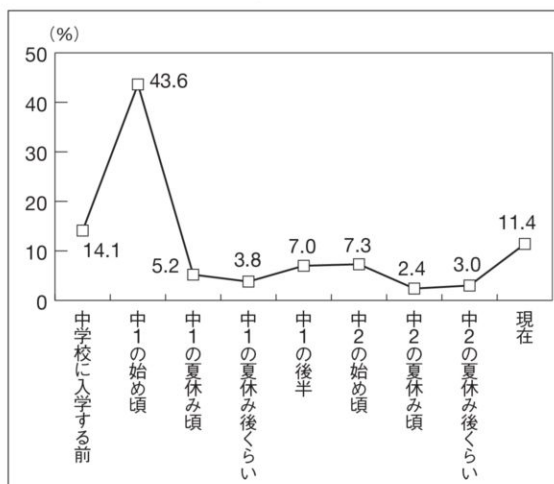
言語学習のみで終わるのではなく,英語学習を通じてより大きな視点で身の回りの物事を見ることができるとをめざして提示した「MYP 単元クエスト」が,生徒のこうした変化に寄与したと考えることもできる。また「英語が使えることで,自分の人生はどう変わるか」という単元クエストを問うた最後の単元の影響が大きかったとも考えられる。しかしそれは同時に, MYP の枠組みを活用して組み立てた単元プラン, および「MYP 単元クエスト」の影響力がそれだけ大きいということの意味するのではないだろうか。

Yashima (2000) の調査において,異文化交流などへの志向 (orientation) は,英語学習の動機づけ (motivation) と有意な相関があった。つまり異文化交流への関心が高い学生は英語学習の意欲も高い傾向があった。そして動機づけは英語の能力 (proficiency) 向上に直接的な影響があったとしている。したがって,異文化交流志向は間接的に英語

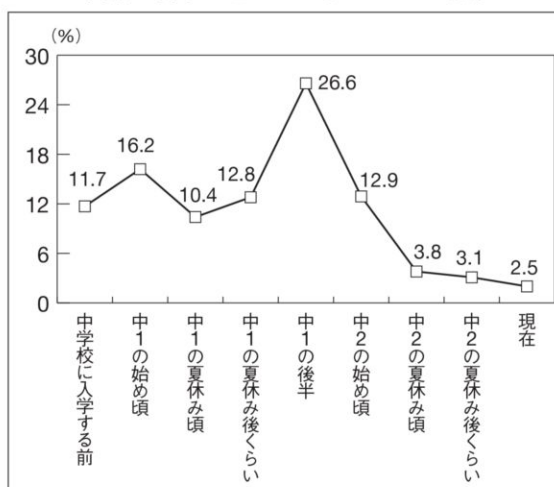
の能力向上につながるとしている。この意味では,本実践で高まった異文化交流志向が生徒たちの動機づけを高め,英語の能力向上へと長期的につながっていく可能性があると考えられる。

3つ目の統計的に有意な差があった項目「英語を学ぶ意欲」は,「他の教科よりも英語の勉強がおもしろいと思う」,「英語の授業に関係なく,英語の新聞や雑誌を読みたいと思う」,「英語の授業中,授業の内容に夢中になり,勉強に集中している」という質問で構成されている。図6にあるように,中学生の英語学習に対するやる気は,中1初めから後半に向けて低くなっており,英語を苦手と感じる時期も中1後半が最も高くなっている (Benesse 教育研究開発センター, 2009)。

最もやる気が高かった時期



英語を苦手と感じるようになった時期



▶ 図6: 中学生の英語学習状況と学習意欲 (n = 2,967)

この傾向を踏まえると,中1の2月中旬に行った

調査で「英語を学ぶ意欲」が上昇していることは、MYP 教育を取り入れた授業実践が、生徒の英語学習意欲に肯定的な効果を持っていたと考えられる。

4.2 英語力を測定するテスト

MYP 教育を行った場合でも、一般的なペーパーテストで測定できる英語の力は向上するか調査した。参加者は中学1年生女子42名である。本研究に用いた英語力を測定するテストは、聞く力を問う問題が38問、読む力を問う問題が6問の計44問で構成されている。初回実施が2011年7月8日で、参加者が中学1年生の1学期という英語学習初学者であるため、聞く力を問う問題が主になっている。読む力は44問中の6問であり、書く力と話す力は測定するに至らなかった。同じテストを2回目2012年2月25日に実施した。著作権の関係上テストそのものを掲載することはできないが、内容の詳細は以下のとおりである。

聞く力 (38問)

パート1 (11問)

英語の単語を聞いて、それが表す最も適当なものをイラストから選ぶ。(8問)

英語の文を聞いて、それが表す最も適当なものをイラストから選ぶ。(3問)

パート2 (8問)

英語の会話を聞いて、ブザーが鳴った箇所に入れるのに最も適当な語を選ぶ。(6問)

英語の質問を聞いて、その応答として最も適当な文を聞いて選ぶ。(2問)

パート3 (12問)

英語の質問を聞いて、その答えとして最も適当な文を聞いて選ぶ。(10問)

英語の指示を聞いて、行き先として最も適当な箇所を地図中から選ぶ。(2問)

パート4 (7問)

英語の会話を聞いて、日本語で書かれた質問の答えとして最も適当なイラストを選ぶ。(5問)

英語の会話を聞いて、英語で書かれた質問の答えとして最も適当な語句を選ぶ。(2問)

読む力 (6問)

英語の短い文章を読んで、日本語で書かれた質問の答えとして最も適当なイラストを選ぶ。

4.2.1 英語力を測定するテストの結果

英語力を測定するテストの結果は表4のようになった。「聞く力」、「読む力」とともに得点が上昇したが、「聞く力」にのみ統計的に有意な差が出た。「聞く力」のパート4では効果量が大きく出たため、結果が変動する割合は大きい。

4.2.2 英語力を測定するテスト結果についての考察

前述したように、MYPの第2言語教育を取り入れた実践では、スピーキングまたはライティングによるアウトプット重視の指導になる傾向がある。本実践でもエッセイ・ライティングや「ワードカウンター」を使ったスピーキング活動などのアウトプット活動を頻繁に行うことになった。そのような授業でも、「聞く力」と「読む力」というインプットの力が伸びている。

白井(2008)によると、知識を身につけるために多大な時間が費やされている日本の英語教育が、TOEFLの得点で国際比較したときに非常に低い結果しか出ていない(pp.71-72)。そうした現状を変えるためには、指導の方向性をアウトプット重視にしていくことが1つの選択肢になるのではないだろうか。

ただ、本研究の英語力を測定するテストは、中1の1学期に第1回目を行うという制約のため、限ら

■表4：英語力を測定するテストの結果 (n = 42)

		平均 1	標準偏差 1	平均 2	標準偏差 2	t 値	p 値	効果量
聞く力	パート1	9.02	1.47	9.88	1.12	-3.57	.001*	.49
	パート2	4.71	1.10	5.71	1.42	-3.34	.002*	.46
	パート3	7.83	1.81	8.69	1.69	-2.95	.005*	.42
	パート4	4.05	1.40	5.07	0.92	-4.55	.000*	.58
	読む力	4.02	0.99	4.43	1.04	-1.93	.061	.29

* $p < .05$

れた内容しか測定できなかった。この測定結果の要因がMYP教育を取り入れた指導であると、限定的に述べるのに十分とは言えないだろう。

5 まとめ

5.1 課題

IB教育は、一部の教科や一部の教員で行われるものでなく、学校や該当のコース全体を対象にした教育プログラムであり、教科間連携がプログラムの全期間を通して計画的に行われるべきものである。本校では、2012年3月現在、英語以外の教科でも試験的に実践している教師もいるものの、それぞれ短発的な実践であり、本来IBで志向しているものとは異なる実施方法となっている。したがって、IB実践の検証として、バックグラウンドが十分とは言えない。

本来MYPは、小学校6年生から高校1年生にわたる5年間のプログラムであるが、MYPは柔軟に各国の教育制度に合わせて実施できるため、日本の学校制度に合わせて、中学校1年生から高校1年生の4年間で実施することもできる。4～5年間のMYP教育が、日本人生徒の英語力の向上や英語学習への意欲向上などにどう寄与するのか、今後、それらを明らかにするために継続的な研究が必要である。

IBOは継続的にプログラムの改善を図っている。第2言語教育については、2012年3月に新しい手引書(Language B guide)が発行された(IBO, 2012)。この新しい手引書では、本研究で活用した「評価規準」も一新されている。日本の中学校英語教育で、この新しい手引書の評価規準をどのように活用できるのか、またその客観性はどの程度のものかを検証することで、文部科学省の「観点別評価」3段階に加え、より具体的な評価規準を設ける手がかりができるのではないだろうか。また今後、より広く活用されるであろう英検の「Can Do リスト」も、MYPの評価規準と連動することで数値化することができ、生徒の英語力を客観的に把握し、英語力の向上に役立てることができると考えられる。

5.2 MYP教育の意義

最終目標としての評価活動を設定し、それを目標にして、明確な意図を持って授業を設計する。「MYP

単元プランナー」ではそれを「逆向き設計」と呼んでいる。この考え方は、Wiggins and McTighe (2005)で述べられており、その考えを西岡(2008)が実践例とともに紹介している。また、中嶋(2000)は、到達目標を見据えた「評価規準表」の作成や「評価シート」と呼ぶ「振り返りシート」(p.144)の作成に言及しており、田尻(2009)も、「逆算」(p.55)という言葉を使って「逆向き設計」の重要性を強調している。MYP教育を取り入れるまでもなく、こうした考え方は既にも実践されてきている。

それではMYP教育の画期的な点は何か。それは、国境を越えて学校全体で全教員が同じように実践できる「フレームワーク(枠組み)」を提示したという点であろう。優れた実践家が作り出してきたものを、MYP教育という枠組みで、学校全体で共有し、実践していくシステムを提示したことである。教育理念から、目標、評価規準、単元プランの作成方法まで、具体的に実践方法が示されている。

一方でMYPの第2言語教育には、言語指導の詳細な指導手順が書かれている「メソッド」に当たるようなものはない。授業中の詳細な指導手順は、各教師の裁量に任せられており、教師の創造性を生かして授業は組み立てられる。和泉(2009)は、現在の外国語教育が、文法訳読法やオーディオリンガル教授法などのメソッドを超え、ポスト・メソッドの時代に入り、インプット、アウトプット、インタラクション、気づきなどを取り入れた柔軟な「アプローチ」を模索していると言う。この「ポスト・メソッド」の時代に、MYPの第2言語教育が日本の英語教育に投げかけるものは何か。そうしたことを明らかにする研究が今後必要だろう。

謝辞

このような貴重な研究の機会を与えてくださった(財)日本英語検定協会の皆様と選考委員の先生方、特に助言者となってくださった村木英治先生に深くお礼申し上げます。滋賀県立大学の小栗裕子先生、帝塚山学院大学の近藤睦美先生、帝塚山学院泉ヶ丘校の三村浩一先生には、研究の過程において的確で貴重な助言をいただきました。本当にありがとうございました。そして、授業のさまざまな活動に意欲的に参加してくれた中学1年生(現2年生)の皆さんに心から感謝します。

参考文献 (*は引用文献)

- * Benesse 教育研究開発センター.(2009).『第1回中学校英語に関する基本調査報告書』.ベネッセコーポレーション. http://benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo/hon/pdf/data_06.pdf(2012年4月1日).
- * Dörnyei, Z.(1990). Conceptualizing motivation in foreign-language learning. *Language Learning*, 40, 45-78.
- * ドルニエイ, ゴルダン.(2006). 八島智子・竹内里(監訳).『外国語教育学のための質問紙入門』.東京:松柏社.
- 原和久.(2002).『IBの教育理念とMiddle Year Program』.『千里国際学園 中等部・高等部研究紀要』第11号.千里国際学園. <http://yayoi.senri.ed.jp/research/>(2012年1月10日).
- * IBO(International Baccalaureate Organization).(2008). *Middle years programme language B guide*. Wales: IBO.
- * IBO(International Baccalaureate Organization).(2009a).『言語Aガイド』.Wales: IBO.
- IBO(International Baccalaureate Organization).(2009b). *Evaluating unit planners*. Wales: IBO.
- IBO(International Baccalaureate Organization).(2010). *Middle years programme guide to school application*. Wales: IBO.
- * IBO(International Baccalaureate Organization).(2011).『MYP:原則から実践へ』.Wales: IBO.
- * IBO(International Baccalaureate Organization).(2012). *Middle years programme language B guide*. Wales: IBO.
- * 和泉伸一.(2009).『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』.東京:大修館書店.
- 松下佳代.(2011).『パフォーマンス評価 日本標準ブックレット No.7』.東京:日本標準.
- * 文部科学省.(2011).『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/07/1308888.htm(2011年7月1日).
- * 文部科学省.(2012).『国際バカロレアについて』. http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1307998.htm(2012年4月1日).
- * 中嶋洋一.(2000).『英語好きにする授業マネジメント30の技』.東京:明治図書出版.
- * 西巖弘.(2010).『即興で話す英語力を鍛える!ワードカウンターを活用した驚異のスピーキング活動22』.東京:明治図書出版.
- * 西岡加名恵(編著).(2008).『「逆引き設計」で確かな学力を保障する』.東京:明治図書.
- 斎藤栄二他.(2007).『NEW CROWN 1 ENGLISH SERIES New Edition』.東京:三省堂.
- * 白井泰弘.(2008).『外国語学習の科学—第二言語習得とは何か』.東京:岩波書店.
- * 白井泰弘.(2012).『英語教師のための第二言語習得入門』.東京:大修館書店.
- * 田口雅子.(2007).『国際バカロレア』.東京:松柏社.
- * 田尻悟郎.(2009).『〈英語〉授業改革論』.東京:教育出版.
- * Wiggins, G., & McTghe, J.(2005). *Understanding by design*. New York: Prentice Hall.
- * Yashima, T.(2000). Orientations and motivation in foreign language learning: a study of Japanese college students. *JACET Bulletin*, 31, 121-133.
- * Yashima, T.(2002). Willingness to communicate in a second language: the Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*, 86, 54-66.
- * 吉田研作・柳瀬和明.(2003).『日本語を活かした英語授業のすすめ』.東京:大修館書店.

資料

資料 1：英語学習および異文化に対する態度を調査する質問紙

資料1 英語学習および異文化に対する態度を調査する質問紙

番号

授業研究アンケート

No.	項目	回答			
		まったく 当てはまらない	あまり 当てはまらない	少し当てはまる	よく当てはまる
1	英語が話せれば、仕事などで、たくさん旅行ができる。	1	2	3	4
2	日本で勉強している外国人留学生と友達になりたい。	1	2	3	4
3	英語を勉強すれば、異文化活動にもっと自由に参加できる。	1	2	3	4
4	近所に住んでいる外国人を助けるようなボランティアに参加したい。	1	2	3	4
5	クラスメートと比べて、英語をよく勉強する方だ。	1	2	3	4
6	学校に外国人留学生がいたら話してみたい。	1	2	3	4
7	英語が話せれば、高い給料がもらえるなどの利益が得られると思う。	1	2	3	4
8	他の教科よりも英語の勉強がおもしろいと思う。	1	2	3	4
9	自分は熱心に英語を学ぶ努力をする方だ。	1	2	3	4
10	英語の授業に関係なく、英語の新聞や雑誌を読みたいと思う。	1	2	3	4
11	比較的長い時間、英語の勉強をする方だ。	1	2	3	4
12	英語を勉強すれば、もっと多くの様々な人々と会い、話すことができる。	1	2	3	4
13	英語の授業中、授業の内容に夢中になり、勉強に集中している。	1	2	3	4
14	英語が話せれば、おもしろい仕事に就くことができる。	1	2	3	4
15	英語を勉強して、外国人の友達をつくりたい。	1	2	3	4

Dörnyei (1990) および Yashima (2002) から抽出。日本語訳は筆者による。

資料 2：MYP 第 2 言語「評価規準 A～E」

English (英語)

A Speaking and listening - message and interaction
話すことと聞くこと - メッセージと交流

どの程度、考えを伝え、交流を持ち、会話の流れを維持できるか。

どの程度

- ・ 課題に適した情報を要求し、提供できるか。
- ・ 人の話す内容を理解し、質問に答えられるか。
- ・ 適切に、詳しく自分の考えを示すことができるか。
- ・ 一貫性のある、流れる会話を維持する能力を示せるか。

評価規準AとBを使って評価する活動には、ロールプレイ、ディスカッション、ペアワーク、インタビュウ、質疑応答のあるプレゼンテーションなどが含まれる。これらの活動により、現実の即時的なコミュニケーションをとる最大限の機会を生徒に与えることになる。

0	以下に説明されているどの水準にも達していない。
1-2	日常の限られた場面においてのみ、時々、コミュニケーションをとることが出来る。 応答はするが、ほとんどの質問やコメントが理解できていない内容である。質問やコメントを繰り返しても同じである。また、応答も十分でない場合が多い。 応答内容が主題に関連していない場合があり、詳しい内容はほとんど(または全く)伝えられない。 沈黙・言い直し・とまどいが多く、それが常に考えを伝えることに影響している。
3-4	日常の限られた場面なら、ほとんどの場合、コミュニケーションをとることが出来る。 応答はするが、いくつかの質問やコメントが理解できていない内容である。また、応答も十分でない場合が少しある。 応答内容は主題に関連しているが、詳しい内容は限られたものしか伝えられない。 沈黙・言い直し・とまどいが、時々、考えを伝えることに影響している。
5-6	日常の様々な場面において、ほとんどの場合、コミュニケーションをとることが出来る。 応答の内容は、ほとんどの質問やコメントが理解できていない内容である。また、応答もほとんどの場合、適切である。 応答内容は主題に関連しており、適切な詳しい内容もいくつかは伝えられている。 沈黙・言い直しがいりか必要だが、考えを伝えることには影響しない。
7-8	日常の様々な場面において、常にコミュニケーションをとることが出来る。 応答の内容は、ほとんどの質問やコメントが理解できている内容である。また、応答もほぼ常に、適切である。 応答内容は主題に関連しており、適切な詳しい内容も伝えられている。 沈黙・言い直しはほとんど必要なく、積極的に考えを伝えることができる。自然な聞こえとなっている。

補足

- ・ あらかじめ準備された文を読む、または暗記したスピーチは、「言語B」の評価規準では、本当の交流にはあてられない。
- ・ 会話するとき、文化の違いや目標言語で受容可能な習慣について、教師は注意するべきである。

English (英語)

B Speaking - language
話すこと - 言語

どの程度、効果的的確に言語を使用できることを示せるか。

どの程度

明確な発音と抑揚で話しているか。
正しく、様々な語彙を使えるか。
正しく、様々な文法を使えるか。

評価規準AとBを使って評価する活動には、ロールプレイ、ディスカッション、ペアワーク、インタビュウ、質疑応答のあるプレゼンテーションなどが含まれる。これらの活動により、言語を使う能力を示す最大限の機会を生徒に与えることになる。

0	以下に説明されているどの水準にも達していない。
1-2	発音と抑揚は間違いが多く、会話全体を分かりにくくしている。 限られた語彙しか使えず、言葉を探すのに苦労している。 基本的な文法構造を使うときにも、多くの間違いがある。
3-4	発音と抑揚にはときどき間違いがあり、そのために会話の分かりにくくなることもある。 基本的な語彙を使うことはできるが、時に適切でない言葉を選ぶことがある。 基本的な文法を使うことができるが、いくつかの間違いがある。
5-6	発音と抑揚にはときどき間違いがあるが、そのために会話の分かりにくくなることはない。 基本的な語彙をよく活用できている。 基本的な文法を、たいていの場合、正しく使うことができる。さらに複雑な構文も試みることがある。
7-8	発音と抑揚は明確であり、そのためにコミュニケーションがとりやすい。 基本的な語彙を非常によく活用できている。 基本的な文法とより複雑な構文を、たいていの場合正しく使うことができる。

補足

- ・ 発音・抑揚：ここではアクセントよりも、明確さを評価するべきである。

「国際バカロレア・中等教育プログラム」の教育方法を取り入れた授業実践とその効果

English (英語)

C Writing - message and organization
書く - メッセージと構成

どの程度、適切な考えを伝え、構成し、論拠を示す力を示しているか。

どの程度

情報や考えを示せるか。
考えを発展できるか。
作品を構成するために、課題に適した形式や構成を使えるか。

評価規準CとDを使って評価する活動には、手紙を書いたり、広告作成、小論文、創作、プレゼンテーションなどが含まれる。これらの活動により、意見や考えを伝達する能力を示す最大限の機会を生徒に与えることになる。

0	以下に説明されているどの水準にも達していない。
1-2	日常の限られた場面においてのみ、時々、情報を伝達することが出来る。 考えは、基本なものであるか、同じことの繰り返しが多い。内容は必ずしも適切でなく、詳しい説明はほとんどまたは全く示されていない。 論理的な構成は、ほとんどまたはまったく出来ておらず、論理を理解することは難しい。
3-4	日常の限られた場面なら、ほとんどの場合、情報を伝達することが出来る。 考えは、たいいていの場合、主題に関連しているが、詳しい内容や論拠は限られたものしか含まれていない。 論理的な構成をとする努力が見られるが、すこしのズレがある。接続表現はほとんど使っていない。
5-6	日常の様々な場面において、ほとんどの場合、情報を伝達することが出来る。 考えは、たいいていの場合、主題に関連しており、適切に、詳しい内容や論拠が含まれている。 論理的な構成ができており、基本的な接続表現を使っている。
7-8	日常の様々な場面において、常に情報を伝達することが出来る。 考えは、主題に関連しており、適切に、詳しい内容や論拠が含まれている。 論理的な構成ができており、情報の伝達を明確にする接続表現を使っている。

- ・ 構成：作文の型を意味する。例えば小論文などで、序論・本論・結論といったもの関連するものである。
- ・ つなぎ語：異なる文の要素をつなげる、文法・語彙を示す。
- ・ 作文のタスクを出す際、作文の規則や習慣上の違いについて生徒が気づくよう、教師は注意すべきである。

English (英語)

D Writing - language
書くこと - 言語

どの程度、効果的・的確に言語を使用できることを示せるか。

どの程度

様々な語彙を正しく使えるか。
様々な文法構造を正しく使えるか。
正しいつづりで書いているか。

評価規準CとDを使って評価する活動には、手紙を書いたり、広告作成、小論文、創作、プレゼンテーションなどが含まれる。これらの活動により、言語を使う能力を示す最大限の機会を生徒に与えることになる。

0	以下に説明されているどの水準にも達していない。
1-2	限られた語彙や文法構造しか使えず、多くの間違いがあり、考えが伝わりにくい。 つづり・表記の間違いが多く、考えを伝えられないことが多い。
3-4	基本的な語彙や文法構造を使えるが、間違いがいくつかあり、ときどき考えが伝わりにくい。 つづり・表記の間違いがいくつかあり、考えを伝えられないことがときどきある。
5-6	基本的な語彙や文法構造をうまく使い、ほとんどの場合、正確である。さらに複雑な構文も試みることがある。 つづり・表記の間違いがいくつかあるが、考えを伝えられないことはない。
7-8	基本的な語彙や文法構造を非常にうまく使い、さらに複雑な構文も試みることがある。語彙・文法は正確である。 つづり・表記の間違いは特にはあるが、考えを伝えられないことはない。

- ・ 綴りや筆記の評価に関する重要度は、言語によって様々である。例えば、中国語や日本語などでは筆記の技術が特に重要だが、英語やロシア語などでは綴りがより重要になる。

English (英語)

E Reading Comprehension
読解

どの程度、指定の言語で書かれた著作を理解する力を示しているか。

どの程度

特定の事実情報を見つめられるか。
主題とその論拠を見つめられるか。
結論を導き出せるか。

評価規準Eを使って評価する活動には、手紙、広告、雑誌、新聞記事、詩などの読解が含まれる。読解の難易度は、全ての基準を生徒が達成できるように、全てのレベルのものを含まなければならない。

0	以下に説明されているどの水準にも達していない。
1-2	基本的な事実を、使いたれた言葉で書かれたテキストの中で見つめられる。 全体的に、限られた内容しかテキストを理解していない。
3-4	基本のおよびより複雑な事実を、使いたれた言葉で書かれたテキストの中で見つけることができる。主題も理解している。 テキストの内容を部分的に理解している。
5-6	基本のおよびより複雑な事実を、使いたれた言葉および使われていない言葉で書かれたテキストの中で見つめられる。主題と詳しい論拠も理解している。 テキストの内容のほとんどを理解している。
7-8	基本のおよびより複雑な事実を、使いたれた言葉および使われていない言葉で書かれたテキストの中で見つめられる。主題と詳しい論拠も理解し、結論を導くことができる。 全体的に、テキストの内容をよく理解している。

- ・ 評価規準Eの最終時点は、読解力と表現力を均等に評価するために、2倍にすることになる。
- ・ これは、最終成績を計算するときに初めて行うべきである。(詳しくは「最終成績の決定」の項を参照)
- ・ 教師は、最高レベルを達成することが可能なタスクを生徒に与えなければならない。読解は、各項目の達成レベルに適合するよう作成せねばならない。
- ・ (評価標準Eは表現力を評価するものではないので) 生徒が習得中の言語で返答するときは、言語の間違いは減点するべきではない。

第 2 段階：逆向き設計：評価から探究による学習活動まで	
内容 生徒が単元クエスチョンに答えられるようにするには、(コース概要にある) どのような知識やスキルを活用することになるのか？ 国、都道府県、市や地域によって定められている場合には、どの程度の水準を目指し、どのようなスキルに取り組みべきなのか？ そのような第 1 段階の重要概念を発展させるために、その水準やスキルをどのように分類して取り組むことができるのか？	
学習姿勢 (ATL) この単元では、教科別および総合的な学習スキルをどのように伸ばせるのか？	
学習経験 生徒は自分に何が期待されているかをどのようにして知るのか？ 事例、ルーブリック (評価指針表)、テンプレートを見ることが出来るのか？ 生徒はどのようにして知識を身に付け、必要なスキルを実践するか？ このようなスキルをどのようにに活用しながら実践するか？ 生徒がすでに持っている知識で十分か？ どのようにしてそれがわかるか？	指導方策 単元の途中で生徒にフィードバックをするためには、どのように形成的評価を利用すればよいのか？ どのような多様な指導方法を用いればよいのか？ 全生徒に対して、指導と学習をどのように個別対応しているのか？ 母語以外の言語で学習している生徒のためにどのような準備をしてきたか？ (教育に関する) 特別支援のニーズのある生徒に対してどのような配慮してきたか？
リソース どのようなリソースを利用できるか？ 単元を学習する中で、生徒の経験を促すために教室環境、地域の環境、または共同体をどのように利用すればよいのか？	

第 1 段階：重要概念、相互作用のエリア (AOI) 及び単元クエスチョンの統合	
相互作用の焦点 どの相互作用のエリアに焦点を定めるか？ そのエリアを選択した理由は？	重要概念 大概念は？ 生徒に今後も長い期間覚えていてほしいことは何か？
評価 どのような課題であれば、生徒が単元クエスチョンに答える機会を持てるだろうか？ 理解を示す証拠として認められるのは何だろうか？ 生徒は、自分が理解した内容をどのようにして示すことができるだろうか？	
この単元において、具体的にはどの MYP 目標に取り組みむか？	
どの MYP 評価基準を使用するか？	

継続的な振り返りと評価

継続的に記録しながら、以下の質問について考えてください。この他にも、『MYP：原則から実践へ』の「単元設計」に関する章に学習意欲につながる質問があります。

生徒と教師

何が魅力的だと思ったか？学問分野別の知識とスキルは、その実力を試されるような場面があったか？学習を通して、どのような探究が生じたか？どのような発展的活動が始まったか？単元と自己の学習の両方について、どのように振り返ったか？この単元を通じて、IBの学習者像のどの特質を取り上げて働きかけをしたか？生徒が自主的に行動するために、どのような機会があったか？

可能な関連づけ

自分が担当する教科群の他の教師や他の教科群の教師達ときちんと連携できたか？他の教科との連携を通じて、どのような学際的理解が形成されたか、または形成が可能だったか？

評価

生徒は、自己の学習を明確に表すことができたか？
 ・各単元に設定された学習目標について、その評価課題によってどの程度生徒の達成度を推し測れるのか？評価基準項目のどのレベルにも生徒が到達可能になっているかをどのように確認できたか？
 次の段階に向けて準備は整っているか？

データ収集

・集めるべきデータをどのようにして決定したのか？それは役に立ったか？

資料4：「振り返りシート」

Class () No. () Name ()

1 単元エッセッション(unit question)は何でしたか？

2 どの学習者像(learner profile)の特性を、どのように使いましたか？

Thinker: 考える人 Communicator: コミュニケーションがとれる人
 Knowledgeable: 知識のある人 Caring: 思いやりのある人
 Principled: 信念を持つ人 Open-minded: 心を開く人 Risk Taker: 挑戦する人
 Balanced: バランスのとれた人 Reflective: 振り返りができる人

3 この単元エッセッションに関するあなたの考えはどのようなものですか？

4 この単元で重要なことは何だと思えますか？また重要概念(significant concept)は何でしたか？

5 この単元で難しかったことは何ですか？またどのようなようにして改善していただけますか？

資料 5 : 「学習者像ワークシート」

他の人が必要としていることと異なることや、自分がいかに異なる世界について肯定的に受け止めようとする。	1	2	3	4
8 挑戦する人 Risk Takers 新しい状況でも自信を失わず、全力を尽くします。新しいことにチャレンジすることが好きです。自分の信念を主張することができます。	1	2	3	4
9 バランスのとれた人 Balanced 自分を大切にし、知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。	1	2	3	4
10 振り返りができる人 Reflective 様々な経験から、どう学んでいけばいいかわかり写えます。自分の強みと限界を理解し、より多くを学び、さらに成長するために目標を設定することができます。	1	2	3	4

合計:

11 1~10の学習者像の中で、あなたが最も大切だと思うものはどれですか？ またそれはどうしてですか？
--

Class () No. () Name ()

目標とする学習者像 Learner profiles	まったく当てはまらない	あまり当てはまらない	少し当てはまる	よく当てはまる
1 探究する人 Inquirers 私は好奇心旺盛で、身のまわりのことについて、知りたいことがたくさんあります。様々な学習分野について調べ、学ぶことが好きです。	1	2	3	4
2 知識のある人 Knowledgeable 私は知識のある人です。すべての学習分野において、地域および世界の問題について知識を持っています。	1	2	3	4
3 考える人 Thinkers 何か問題を解決するとき、創造的に分析的に解決する方法を考えます。責任を持って、問題解決のための決断をします。	1	2	3	4
4 コミュニケーションがとれる人 Communicators 2つ以上の言語を理解し、自信を持って自分自身を表現することができます。	1	2	3	4
5 信念を持つ人 Principled 私は誠実かつ正直で、まわりの人々を尊重して行動します。自分の行動とその結果に責任を持ちます。	1	2	3	4
6 心を開く人 Open-Minded 自分に誇りを持っています。他の人の意見や伝統、価値観を尊重します。何か決断をするときは、別の視点や意見も考慮に入れます。	1	2	3	4
7 思いやりのある人 Caring				